102歳 私の話
あるがまゝ行く

死について考えた、凜君の手紙

日野原重明

私は昨年11月、このエッセーに、児童文学『葉っぱのフレディ』と、それをもとに私が作った脚本の話を書きました。それを読み、前回ご紹介した中学1年の俳人、小林凜君が、私に次のような手紙をくれました。

「自分が散る寸前に、フレディは散ることに対して『怖い』という感情を持っていましたが、僕は、散ったり死んだりすることはもう一つの始まりだと思います。生きる者は最後には死ぬけれど、いつかはまた地上に生まれると思っています。先生は『我々はどこへ行くのか』と書いておられますが、その『どこ』とは、あの世のことではないかと思います。（中略）毎年秋になると、たくさんの葉が散り、僕は『葉っぱのフレディ』の物語を思い出します。《フレディが落葉の国から降臨す》。僕の8歳の時の俳句です。『命はめぐる』。そして、フレディもまた春になると青々とした葉に生まれ変わるのだと思います。『散る』ことは恐れることではないのです。もう一つの始まりなのですから」

凜君は低出生体重児として生まれ、小学校時代、命を失いかねないほどの、むごいいじめに遭いました。物語でフレディが死への恐怖を口にした時、人生の兄貴分であるダニエルは、死についてこう語りました。「ぼくたちは葉っぱに生まれて　葉っぱの仕事をぜんぶやった。太陽や月から光をもらい雨や風にはげまされて　木のためにも他人のためにもりっぱに役割を果たしたのさ。だから　引っこすのだよ」。そしてこうも言います。「まだ経験したことがないことは　こわいと思うものだ。でも考えてごらん。世界は変化しつづけているんだ。変化しないものは　ひとつもないんだよ」。やがてダニエルもフレディも大地へと舞い降り、眠りにつくのです。

死の先に人間がどこへ行くのか、凜君も私も、まだ「その先」を経験していません。ただダニエルが言うように、たとえば凜君は俳人として、私は医師として、周囲に励まされ、時には誰かを自らの仕事で励ましながら、死の瞬間まで「人間としての仕事」を全うしていくほかない。「死」を思う時、私たちは自らが与えられた時間の貴重さ、「生」の意味に、あらためて気づかされるのです。

（聖路加国際メディカルセンター理事長）

絵と題字・小田桐昭

朝日新聞　2014年5月17日